

# 国際奉仕部会

アドバイザー・パストガバナー	青島 廣幸 (静岡)
リーダー・次期国際奉仕委員長	長谷川 了 (浜松北)
サブリーダー・次期世界社会奉仕委員長	森川 清 (甲府南)
サブリーダー・次期青少年交換委員長	大川 正博 (沼津)

報告者名：長谷川了 (次期国際奉仕委員長)

## 分科会での協議事項

識字率向上プロジェクトの推奨

国際ロータリー第 2620 地区 国際奉仕委員会、世界社会奉仕小委員会では、昨年度、皆様のご協力を頂き、「WCS アンケートの結果」を小冊子にまとめ、84 クラブの国際奉仕委員長へ配布させて頂きました。

次年度の RI 会長方針に伴い、途上国の子供たちの識字率向上に繋がる事業を行っては如何でしょうか。プロジェクトを取り上げて大事業、中事業、小事業とメニューをまとめてみました。委員会としてご検討をお願いしたく地区協議会の勉強会に於いてご案内申し上げます。率先して何かの事業を行っていただければ幸いに存じます。



規模別事業	具体的事業	予算	受付仲介団体
・周年事業クラブ向けの大・中事業	・学校建設 ・図書館建設	・500万円前後 ・300万円前後	・姉妹クラブ(A) ・現地RC(B)
・クラブの目玉とする中規模事業	・放置自転車の寄贈 4500台/年間 整備組合で管理。コンテナ2台に分解して450台載る。(分解→運搬と現地組み立て)	・コンテナ2台が20万円前後でできる奉仕	・タイ、バンコクのスリウォンRC、 ・カンボジアは現在ルートの確立を協議中です。(C)
・単年度向け小規模事業	・里親支援 月々5,000円、年間60,000円で1名の子供が学校に通うことができる。	・6万円前後	・NGO法人(D)
	・教育機材、学用品、消耗品等の寄贈 不要になった品	・規模に応じて	・オイスカ参加者(E)に委託し、現地の子供たちに直接渡す。

上記以外にもたくさんの窓口はあると思いますが、代表例として選んでみました。

- A：途上国に姉妹クラブがありましたら、クラブ to クラブで行ってください。
- B：甲府城北 RC からお話を伺ってください。親切丁寧に教えて頂きます。その他、要望があれば、カンボジア等の RC に問い合わせてみます。
- C：放置自転車の財団法人あり、4500 台/年間 整備組合で管理。現地の仲介 RC とルートを確立中です。(当面、三島南 RC 山口 辰哉様)
- D：(財)フォスタープラン協会 東京都世田谷区三軒茶屋 2-11-22 サンタワーズセンタービル 10F & 11 F 支援者向け TEL 03-5481-6100

E : ① 山梨地区の今年度の植林地はタイ国のラノン県で、8月3日～8月9日です。現地の子供たちは学用品（ノート、鉛筆等）を欲しがっています。甲府南ローターアクトが参加しますので代表して渡して頂きます。ご協力を頂いたクラブには、帰国後にローターアクトが例会へ出席し報告をする予定です。

【オイスカ山梨県支部 事務局 田中様 055 - 231 - 6699】

② 静岡地区の今年度の植林地はフィリピンのヌエバビスカヤです。8月2日～8月8日です。20年前に植林した「みかん」の木が現地で一大産業になってきているそうです。静岡では熱海 RC、浜北 RC、浜松東 RC、熱海南 RC の応援を得て、それぞれの地域の高校生が毎年参加しています。この参加者に託することができます。

【オイスカ静岡支部 事務局長 市村（イチムラ）様 053 - 464 - 0339】

### 森川清サブリーダーの報告

先ず、2620 地区の 84 ロータリークラブの参加者に、国際奉仕委員会の中に世界社会奉仕小委員会があるクラブがあるか否かの問いに 6 クラブだけが挙手をし、委員会設置クラブが少ないことを確認しました。

WCS プロジェクトはマッチンググラントと同じものであるという誤解があることや、マッチンググラントプロジェクトと同様に、WCS プロジェクトは 2 カ国のロータリアークラブが関与するものが多いことを伝えました。

WCS の行動への指針の中には、2 カ国以上のロータリアンが参加していることとか、参加国中、1 カ国はプロジェクトの実施国であるとかが記載されていますが、菅沼次期幹事とも相談して、必ずしも 2 カ国のロータリアンである必要はない。身近なところから、援助を必要とする人々に、援助を提供したいという、ロータリアンが参加することでよいとの見解を頂いたことを伝えました。

そして我々地区の役割としては、プロジェクトにはどんなものがあるかとか、相手国の窓口等をお知らせして推奨することであると考えを述べました。

この考え方は、現、柳瀬委員長が昨年に「WCS の行動への手引き」の冊子をまとめ各クラブに配布し、そして今年は各クラブよりアンケートをとり冊子にまとめて各クラブに配布しました。それらを引き継いでいることを伝えました。

テーマを次期 RI 会長が強調事項の 1 番に掲げている「識字率向上」に関するプロジェクトに絞ったことを伝えました。

大事業に関しては、周年事業クラブの実行委員長宛と、次期会長、国際奉仕委員長宛に「記念事業として途上国の子供たちの識字率向上につながる事業を行っては如何でしょうかとご案内を差し上げていることを伝え、記念事業では、できれば大事業を取り入れていただきたいと重ねてお願いをしました。

そして当国際奉仕委員会で決定できそうな手軽にできる中事業、小事業を特に推奨することを伝えました。

### 事例発表

#### 【学校建設】

先ず、学校建設の事例として甲府城北 RC からの予め提出された資料を基に要点を発表しました。（別紙資料「ラオスとの友好のかけ橋事業」）

#### 【放置自転車寄贈】

次に放置自転車の寄贈を行っている三島南 RC の山口様より発表をいただきました。比較的容易に取り組める事業でお勧めしました。

(山口様の発表内容)

3年前から、タイへ放置自転車の寄贈を行っている。元RI会長のラタクル氏の所属するタイ、トンブリRCの子クラブであるスリオンRC（メンバーはタイ駐在の日本人が大半を占める）の中村氏を介して事業を行っている。10回／年の計画で日本中のRCから募集をしている。三島南RCの紹介で島田RCも昨年参加して頂いた。

他方、カンボジアへ、ロータリーへ入会する以前の1996年から、個人でカンボジアに学校建設等を行ってきた佐野氏、新富士RC（昨年入会）も放置自転車の寄贈に意欲的に取り組み始めた。

最近、(財)日本自転車駐車場整備センター(日本自転車振興会の下部組織)で、タイのスリウォンRC、カンボジアのメトロRC、新富士RCの佐野氏、現静岡第三分区ガバナー補佐木村氏の4者で今後の推進に向けての協議を行った。

タイは日本での寄贈元が増えてきているが、カンボジアはこれからなので、カンボジアのルートを確認するほうが良いのかもしれない。但し、金額等については不明です。

現在、放置自転車の在庫は充分あるようです。カンボジアについては現地受け入れ体制、日本での協力体制（新富士RCだけでは難しいと思います）が確立しないと、進まないのでは動向を見守りながら進めて行くことを伝えました。

#### 【里親支援】

最も簡単な事業の里親支援の説明をしました。

#### 【学用品の寄贈】

一番身近で、毎年行っているオイスカの地球環境植林フォーラムの参加者に委託して、現地の子供たちに学用品を贈る事業を推奨しました。

#### 【助成金の申請受付】

事業計画と申請書を7月1日～9月末までに提出を頂き、効果的なプロジェクトに助成を行うことを伝えました。

#### 【その他】

協議会時間外で、浜北RCのメンバーがバングラディッシュの自閉症の子供たちを支援したい意向で検討を始めていることを聞き、ロータリークラブの地区事務局の連絡先や、NPO法人の連絡先を後日伝えました。

静岡南RCからはスリランカにマッチンググラントを使用しての人的プログラムの事業を計画していることを聞きました。

### 大川正博サブリーダーの報告

#### 1. 分区制について

分区内輪番制と言ってきましたが、私は分区制と呼んだ方が適切であると考えています。分区制の内容としては「各分区にて1ロータリー年度に1人以上の交換学生の受け入れを行っていただくこと」が現在のところ適当であると考えています。

分区内輪番制と言いますと、受け入れの順番を明確に決めることや、全クラブが受け入れに参加することなどの堅苦しいイメージがあるからです。

静岡第6分区では青少年交換事業に関する申し合わせ（案）を平成18年3月15日付けでお作りいただいています。参考までに資料3として紹介します。

## 2. 2006年2月26日開催の国際奉仕委員長会議について

昨年、今年と2年続けて開催させていただきました。2回目の今回は昨年に比較し、重要課題の分区制に対する参加者皆様のご理解が格段に高まっていると感じました。各次期ガバナー補佐の分区総評には青少年交換事業に対して一部の厳しいご意見もありましたが、多くの分区で分区制をとり、この事業をより進展させるべきであるというご意見をいただきました。地区国際奉仕・青少年交換小委員会のメンバー全員が大変心強く感じたことと思います。

資料1 去る2月26日に開かれた国際奉仕委員長会議における経過報告

資料2 青少年交換プログラムアンケート

## 3. 次期ガバナー補佐へ再度のお願い

PETS開催の前日の3/25、甲府市談露館にて時期ガバナー補佐研修会議が開催されました。国際奉仕・青少年交換小委員会の5人が（小林現国際奉仕委員長・長谷川次期国際奉仕委員長・倉橋現青少年交換小委員長・平野次期青少年交換副委員長・大川）次期ガバナー補佐に青少年交換事業について再度のお願いを致しました。

次期ガバナー補佐から次のような貴重なご意見・ご要望をいただきました。

山梨第2分区・すでに高校に対し募集に関する説明を行った。

- ・区内会員に関心をもってもらうよう1会員1,000円の分担金をいただくことを考えている。
- ・派遣希望国が英語圏に偏る傾向にある。（学生の将来を考えると英語圏以外の方がむしろ有利かもしれません。）

静岡第4分区・国際奉仕委員長会議では悲観的な意見しか出なかった。

（受け入れ学生次第かもしれない。）

- ・USAでは日本が第一志望の学生が比較的少ないように思う。（地区委員会の経験上、第一志望でもこんなはずではなかったという場合も多く、逆に第二志望以下でも思ったよりも良かったということも多いようです。）

静岡第5分区・PETSで青少年交換事業について熱く語って欲しい。

（翌日は派遣オリエンテーションを米山記念館で開催予定でしたので丁重にお断りしました。）

- ・派遣応募学生の募集締切が7/10ではガバナー補佐になってすぐで時間的余裕がないのもう少し延長してほしい。

（今年から8/31に延長しました。ただし9/2～3にオリエンテーションが開催されますので応募をお早めをお願いいたします。）

- ・国際奉仕委員長会議はなぜ2月に開催するのか

（各クラブの委員長決定時期を考慮しています。地区協議会の次期に交換事業のお願いをしても予算面などで事業計画に入れてもらいにくいと思います。）

静岡第7分区・公募の場合、派遣は良いとしても受入高校の問題がある。

## 4. 次期の事業計画のあらましについて

青少年交換小委員会の年間事業計画は毎年度かなり確立したものになっています。派遣学生説明会、選考会と4回の説明会及びさよならオリエンテーション。

受入学生説明会：入国前ホストクラブ説明会・入国直後の説明会・富士登山・研修旅行・地区大会・1月の説明会・スキー研修・さよならオリエンテーション（修了式）

恒例となっている事業の他に

- ① 受入学生の紹介とともに、帰国学生の報告を地区大会等でご披露できればと考えています。毎年、帰国直後の9月上旬のオリエンテーションで帰国報告会を行っていますが、少人数の方に聞いていただいているだけです。

自信と見識を深めて帰国した学生の貴重な経験談は感動をもたらします。現ガバナーは帰国学生の報告にふれ、「ロータリーはこんなにすばらしい事業を行っているのだとあらためて感じた」と感想を述べられています。是非多くの皆様にお聞きいただきたいと思えます。

- ② 受入クラブ・ホストファミリーへのお礼の訪問  
地区委員会で分担し訪問を企画中です。

## 5. 地区助成金について

地区活性化資金より 150 万円が予算化されています。

計算式は期首 50 人以下の会員数のクラブについて  
80 万円－（期首会員数×1 万円）となっています。

今後の国際奉仕活動がさらに実りあるものになりますよう、各クラブの国際奉仕・青少年交換小委員会への皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

## 質疑応答

静岡第3分区の田島会員より以下の質問がありました。

- ・ 分区制について総論賛成、各論反対ですが、その理由は派遣する年齢や期間について問題があるのではないかとということと、国際奉仕委員会が分区制における基準的な問題や予算等を決めることはできないのではないかと。

これについて以下のとおり回答がありました。（以下録音テープ抜粋）

- ・ （青少年交換副委員長 平野正俊 掛川グリーンロータリークラブ）

こんにちは、今年度青少年交換副委員長をさせていただいております平野です。私は実は若い時代、高校時代から海外を目指して出かけて行った一人なんです。そしてそうした経験が自分の人生観を変えて、地域に帰って国際交流活動を 30 年間やっております。その間に NPO 法人の国際交流センターの理事長をさせていただいたり、本当にたくさんの方たちが集まってきているんですね。実は職業は農業をやっております、JICA の事業もここ 20 年間の間に 100 名くらいの世界各国の農村のリーダーの育成をしております。こうして一緒に同じ屋根の下に生活して、同じ釜の飯を食って、それぞれの経験を生かしていただくということを行っております。そういう中で私の子供も育ち、二人の子供が青少年交換でアメリカとオーストラリアへ行かして、高校生時代は非常に感受性が豊かですね。自分自身がまだ成熟していないという課題も出ていましたが、その年代は年代での素晴らしい感性というのがあります。例えば小学生の段階で行っても、それは非常に大きいことなんですね。そういう意味では高校生が持っている可能性は実は大学生、成人の人たちが海外に出る 7 倍の吸収力があるといわれています。そうした経験というのが、まず自分の感性として地球上に生きていくという基本的なベースができていくということと、その人たちと一緒にどうやって生きていこうかということの将来展望が生まれてきます。これからの国際化の時代というのは国境が必ずなくなってくるという風に私は思っています。そうしたときに、地球に暮らす一人の人間として、何をしていかなければならないかということは、高校生として、派遣をさせていただいた学生の中に必ずそういう芽が育っていきます。ですので、その後の生きる人生、まわりの社会を巻き込んでいく力、そ

して、そういうものがどんどん輪になって広がっていきます。世界の地図を広げたとき、概ねどの国がどこにあるというのがわかるんですね。海外に行ったそうした経験がどこに山があり、川があり、そしてその白い地図の上にはいろいろな色が塗られて、凹凸ができて立体感ができていくという経験につながっていくと思います。これはロータリーの活動に本当にふさわしい、素晴らしい事業だと思います。そういうふうに自信を持って、非常に強く感じていますので、ぜひご理解をいただいて、内容がこういう短い時間ではなかなか説明できませんので、私どももう少し知りたいという場合は、そのクラブや分区に出て行って説明させていただきたいと思っていますので、ぜひ学んでいただく機会を設けていただければと思います。ぜひよろしくお願いいたします。

・ (国際奉仕部会 加藤精一 長泉ロータリークラブ)

長泉ロータリークラブの加藤と申します。娘はメキシコに行きました。娘にはこのプログラムは留学ではなくて、人と人との交流、そういったものなんだということを言ったんですが、あるとき娘から手紙がきまして、向こうの現地のクラブが少数民族を保護している、その活動に伴って現地の村に行ったそうです。その村に着きますと、数百人の子供たちが娘のところに来まして、お金をねだるんですね。本当に1ペソ、たわいのない金額だったので彼女は一人ずつにあげだしたんですね。そうするとみるみるうちに自分のもっている小銭が全部なくなってしまったと、また全員の子供に渡せなくてまだそこに50人、60人という、ふとその時に彼女は泣き出してしまったんですね。なぜ泣き出してしまったかということ、ああ、これは自分のやっていることは正しいことではないんだと、お金をあげることが正しいことではなくて、この子供たちに自分は何を教えられるか、どうしたらお金を稼げるかとうことを考えたほうが、自分にとっていいことなんだということをそこで初めて気がついたということをおっしゃっていました。まさしくこのプログラムの成果がそこに表れている気がします。このような有意義なプログラムなんですが、だんだんと参加クラブが少なくなってくる、そうすることによって生徒数が少なくなってくるわけなんですが、この小冊子の中に拝見しますと、神奈川・東京地区では分区制ということをやってらっしゃるといことなんですが、いまひとつこの分区制にすることによっての利点、そして欠点が見えてこないんですが、こういった東京・神奈川の方々からの報告をおしえていただければと思います。

・ (次期国際奉仕委員長 長谷川了 浜松北ロータリークラブ)

神奈川県は分区が2つに分かれておりまして、私どもが行きましたところは新横浜駅を中心にした地区ですね。そこでは強制的に全部を回すのではないということ、そしてその地区の分区の中でもどうしても無理だというクラブは順番で飛び越していくんだそうです。ただし、その小さいクラブと大きいクラブが協力して一緒に受け入れたりすることで全体に影響がいくようにやっているということでした。そうしますと全部のクラブがこの活動に参加するんですね。ですから全部のクラブがこのことを経験するものですから、批判するにしても賛成するにしてもみな経験者が経験の中から出た批判をしたり賛成をするということのようです。ですからかなり具体的に話し合いができるということですね。それから東京の青少年交換委員長会議というのが年2回、全国の青少年交換委員長が集まっているいろいろな議論をするわけですが、その地区の必ずガバナーが率先して青少年交換委員長会議に出て、そしてガバナーがその地区の重要な活動として位置付けている。従いまして、地区からこれを担当しているクラブに100万円無条件で補助金が出るんだそうです。それから例えば私立の学校へ行くと授業料を分担してほしいというところがあるようですので、そうするとだいたい120万とか合計でいうと130万位、地区から費用がでるそうです。ですから考え方としては、ロータリーの活動は自主的な活動だからそのクラブに任せてよいということ、自主性を非常に尊重するけれどもこういうプロ

グラムを地区全体でバックアップしながらやっというのが二つ重なった形に、私はこれを受け止めました。そういう点で良い点は小さい30人くらいのクラブが年間100万くらいのプログラムを組んで、そしてまわりのクラブの応援もなしに孤立無援の状態で歯軋りしてがらんばっている、そういう状態はないんだということが分かって、それが非常にいい点だと思いました。それから、課題だと思いましたが、やっているクラブとやっていないクラブがあると、やっていないクラブが肩身の狭い思いをするかなという感じがしました。それからもう一つは派遣するクラブと受け入れするクラブが必ずしも同じではない。神奈川県でやっていたのは、1分区で1ヶ所どこかで受けるということで公式です。それから派遣するのは地区の高等学校に何十という高等学校にポスターや説明書を作って全部に配るんだそうです。そうすると地区全体からかなりの人数の方が応募してきて、そこには8分区そこにはありましたからその全体の中で派遣は8名、ただし、受け入れをするのは1分区1人ずつということで、必ずしも1分区1人派遣して1人受け入れということではないということでした。まだ説明が十分ではありませんが、資料もたくさんもらってきて、大変参考になりましたので、私の夢はこれを来々、再来年すぐに実行できると思っと思っていますので、数年準備をひとつずつ積み重ねながら、各分区、各クラブの賛成を少しずつ得ながら、少しずつそういう方向に進めていけたらいいなということですので、分区制についてはそれくらいのスパンでゆっくりお考えいただいて、これからはいろんな意見をたくさんいただきたい、そして私どもも勉強させていただきたいと思っいます。

#### 『ラオスとの友好のかけ橋事業 —ホーサー小学校支援事業—』について

甲府城北ロータリークラブ

『ラオスとの友好のかけ橋事業—ホーサー小学校支援事業』は、2002年9月に甲府城北ロータリークラブが単独事業として建設したセーコーン県タテング郡のホーサー小学校に対して行う支援事業です。

2002—01年度、デブリンR I会長の年度が始まる前に、何回かの準備理事会を開きましたが、その話し合いの中で、クラブが一つになって、皆が力を合わせてできることをしたいという思いが多く語られました。会員の一人が以前から行っていた、ラオスの子供への奨学金支援でラオスの教育事情も少し知っていたことから「ラオスに小学校を建設しよう」という提案があり、準備理事会としての検討が始まりました。「意識を喚起して 進んで行動を」というデブリンR I会長のテーマも励みになり、年度が立ち上がる前の各々の委員会の会議にも理事が行って、この件を説明し理解を得る努力をしました。

年度の最初の例会で国際奉仕委員長が会員に「ラオスに小学校を建設したい」という提案をしましたが、出来るのかな～という反応と、消極的な否定という反応でした。その後全員出席のクラブ協議会を2回開き、集中的な話し合いを行い、また例会でラオスでの学校建築に関わっている建築家などを招いて細かな経過や実際の取り組みなどを聞く機会を設けるなどして、約半年を経てクラブ10周年の記念事業として実行することとし、クラブとしての建設にむけた準備が始まりました。

ラオスにはロータリークラブが無く、また学校という施設建設には同額補助金が使えません。しかしクラブで一つになって何事かを達成しようという最初の思いがありましたので、どうしてもクラブ単独でも学校を建設したい、との強い思いがありました。当時会員は35人位でしたが、何とてでも自分達のクラブだけで作ろう、という強い気持を持った会員が核となって活動を進めてきましたが、小さなクラブではクラブ皆の物心両面の協力がなければ達成できないことを痛感しました。

この建設には日本のNPOも関わっていて、クラブ内でも建築費が高いという議論もありましたが、このような活動をしているNPOの運営や組織に力を貸すのもロータリーとしての務めではないか、という気持から仲介をお願いしました。もちろんこのNPOの担当者とのミーティングを重ね実行へと移したわけですが、ラオスは社会主義の国ですから自由に事を運べません。このNPOはラオスに

現地駐在員4名を配し、彼等が官庁との折衝、調整、また国内を駆け回っての実態調査や具体的実施事業の計画、見積および業者の選定、事業経過の確認、完成時引き渡しなどを行っており、私達がラオスのホーセー校にいなくても事業の経過などが分かるシステムを築いています。そのことにより私たちのクラブが国内で行う活動とやや同じレベルで国外でも事業が実施でき、東京のNPOの担当者との打ち合わせ事項はインターネットでラオス駐在員に指示としてだされ、またラオスでの進捗状況も、多少の時間的な問題はあったものの日本国内で知ることができました。さらに現地駐在事務所は教育現場が必要としているものを的確に把握し、教育環境改善施策など適時適切を要求される事柄にも対応できる人材と能力を有しています。

学校は2002年9月に完成しましたが、小学校建設は次の方針で建設されました。

- ・ラオスの将来を担う子供達が気持ちよく学べる空間であること。
  - ・ラオスの建築事情と気候、風土などや環境条件に配慮すること。
  - ・耐久性があり補修可能で永く使用できること。また村人が建築補修に参加でき、自力で補修できること。
  - ・ラオスにおける建築技術や建築に対する考え方の発展に貢献できること。
- であり、さらに次の点に考慮して建築を進めました。
- ・壁のレンガ積みはモルタルの上塗りせず、現地の土にセメントを混ぜ人力プレス機で作る。屋根瓦も同じ方法で作る。
  - ・壁は少なく、窓を多くとる。通風がよいルーバー式の窓にする。
  - ・高窓で通風と光を取り込む構造にすることです。

特に壁用ブロックと屋根材の人力プレス機での生産指導を実施して、村人が補修に参加でき、自力で補修できるような指導を行いました。

学校が出来てからは、次の年度での取り組みとして「保健衛生プロジェクト」「図書室の開設」「水道水の確保」「学用品の支援」を実施してきました。また「教室の増築」も目標の一つとして掲げました。

## 1. 保健衛生プロジェクト

ホーセー小学校の生徒2人が不発弾の爆発で死亡し4人が重軽傷を負ったという悲劇がありました。後日、毎日新聞全国版に『不発弾の眠る国ラオス』という3回連続の特集記事の冒頭に取り上げられ、ベトナム戦争時、9年間に200万トン以上の爆弾が投下されたことを報告する記事になりましたが、その事故への医療的対応の遅れを踏まえ、保健室の開設という取り組みを始めました。子供達の成長を見守ること、その子供達が大人になった時の保健衛生への関心などに期待しながらの開設ですが、実際的には子供達の成長の記録作り、薬の常備、および緊急時の旅費および手術費などの備蓄を含んでいます。

## 2. 図書室の開設

ラオスでは図書室はほとんどないのが実情です。ホーセー小学校のあるセーコーン県は貧しい県ですから、なおさら図書室などは望むべくもありません。だからこそこに図書室を作りたいと思いました。

図書は毎年贈っていますが、木で作られた図書箱は三段になっていて、真ん中の段は両面が本棚になっていて、表面にはロータリーが贈ったことが大きく書かれています。箱は持ち運びができるように頑丈な取っ手が付いていて、鍵がかけられるようになっています。

布製の本棚は全部開いて壁などに架けて使用します。この本棚にもたくさんの本が入っています。この布製の本棚は折り畳むと背負えるようになって移動図書館にもなりますので、広範囲で活用することができます。

### 3. 水道水の確保

ホーセー村はきれいな水が豊富にある村です。しかしその湧き出ている水を自分達の暮らしに水道として活用する有効な手段がありませんでしたが、近年のその源流の近くに貯水槽を作り、そこから太いパイプで国道沿いまで引いてきて、そこから細いパイプで個々の水道施設まで引いてくる、というインフラの整備が進んでいきました。小学校にもその太いパイプから校庭を横切ってパイプを敷き、2ヵ所の水道施設を作る工事を行いました。

### 4. 学用品の支援

基礎的な読み、書き、簡単な計算などを教えていますが、ノートや紙が無いために書き取りができず、家に帰ってからの学習もできない子もいます。毎回の訪問ではノートや鉛筆、ボールペンなどを全ての子供達に配ります。またサッカーゴールとネット、ボール、サッカーチームのユニフォームも贈りました。

### 5. 教室の増築

新築完成したばかりなのに、なぜ、と思われるかもしれませんが、学校が新しくなったことで500人近い子供達を通うようになり、親が子供の教育に目を向けたよい機会でしたが、5教室ですからすべての子供を迎え入れることができませんでした。1教室60人詰め込んでも全体で300人しか学べず、通ってくる子供が減ってしまいました。教室の増設が要望される背景には、通える子に学びの場を提供したい、という現地スタッフの熱い思いを感じることができます。

お陰様でこのことへの、地区を始めとするご理解をいただき、来年度中には1教室を増築できるめどがつかまりました。

これまで4年間で3回ホーセー小学校へ訪問し、村の家に2泊するなどの体験を通して、私たちも彼等の生活や教育事情などの多くを知ることができました。

それまで無かった太い電柱が2本校庭に立っていて驚いたこともあります。水道といい電気といい、急速にこの村にも入ってきて、自給自足的な経済も、お金を必要とする経済に急速に変わろうとしています。

いやおうなしの近代化にクラブとして今後の支援のあり方も難しくはなりますが、小学校支援、教育環境支援という方向を誤らずに、また背伸びすることなく続けていこうと思っています。これらの積み重ねを通して、クラブの独自性を培い、国際親善に役立っていくことができれば幸いです。小さなクラブに出来ることは、極めて限定的なことです。地道な交流、支援を続けることにより識字率の向上や子供達の未来に資することができるかと確信していて、さらには国際親善や交流への一助になっていくことができるのではないかと考えています。

この小学校で学んだ子供達がやがて村を背負っていく頃になると、学んだことによって何かが良い方向に変わっていくように思います。学ぶことによって生活環境や保健衛生環境、さらには次の世代への影響などに良い循環が構築できれば、クラブとしてもしあわせなことだと思っています。

資料 1 去る 2 月 26 日に開かれた国際奉仕委員長会議における経過報告

第 2620 地区 青少年交換小委員会  
委員長 倉橋義郎

最初に私ども青少年交換小委員会の最大関心事であります区内輪番制についての報告をしたいと思えます。そもそも区内輪番制に移行していこうという考えの根底には当地区における交換学生の減少があります。その原因はロータリアンの数が年々減少していることや、高齢化にともない受入が困難になっていること等があげられます。しかしながら、いまや国際化がいたる国々で叫ばれ、年々その重要性が増しておりますなかで、当地区だけこうした青少年の交換事業を衰退させておくわけにはまいりません。そこで、本件の会議になったわけですが、昨年第 1 回国際奉仕委員長会議を行いましたので、今年で 2 回目ということになります。前回と同様、各クラブの今年度、次年度の国際奉仕委員長にその所属する分区ごとに集まってもらい、次年度のガバナー補佐がそれを統括して最後に総評を発表するという形式を取りました。区内輪番制につきまして集約したものを以下に列挙してみます。

(山梨第 1 分区) ガバナー方針として打ち出せば区内輪番制に協力はするが、会長幹事会での検討も必要ではないのか。また、次年度からは分区で最低一人交換学生の受け入れ派遣を検討する。さらに区内輪番制とは別に数クラブが共同で受け入れる件についてはどうなのか等の質問があった。

(山梨第 2 分区) 次年度から区内輪番制に協力できるし、大いに賛成という意見が多かったように思う。当地区での最大の関心事は経費の点で、区内輪番制ということになれば、他クラブや地区からの費用的な援助が得られるから、こうした事業を積極的に推進していけるという期待のほうが強かった。

(山梨第 3 分区) 区内輪番制については賛成の声が強かった。そうなれば、今後分区で 1 名の交換学生を出すことができ、小クラブにも交換事業への道が開かれる。

(山梨第 4 分区) 当地区ではクラブ会員数が少ないクラブが多く、受け入れるにしても共同の受け入れになるが、区内輪番制については当会への出席クラブが少なかった関係で結論が出せなかった。

(静岡第 1 分区) 当地区では過去に 2 回しか青少年交換事業の経験がなく、そのときの苦労話が出て、しかもホストファミリーが一人で一年間面倒を見たといった具合で、とても区内輪番制までの話しはできなかった。

(静岡第 2 分区) 区内輪番制に賛成 3 クラブ、反対 4 クラブ。次年度について協力はするが、区内輪番制を地区から押し付けられてまでやるつもりはない。しかし、地区の助成金ありがたい地区内での協力は嬉しい。

(静岡第 3 分区) 総論賛成、各論反対である。地区からの区内輪番制を強制的に推し進めるのは大反対である。

(静岡第 4 分区) 国際奉仕委員長会議でこうした区内輪番制を決定するのはいかがなものか。会長

幹事会もふくめてコンセンサスを得るべきではないのか。

(静岡第5分区) 次年度の分区内輪番制は不可能であるが、一応努力はしてみる。当分区内のクラブに分区内輪番制反対の声が多い。その理由として地区からこうして押し付けられる事業はやれないし、本来ロータリー活動は各クラブの自主性を重んじるべきものである。逆に、交換学生が減少しているならば青少年交換事業そのものを見直すべきではないかといった強硬な意見まであった。しかし、他のクラブが青少年交換事業をしているときは協力してもいいという意見もあった。

(静岡第6分区) 分区内輪番制には賛成であるし、そうでなくても、今後当地区からなるべく一人の交換学生をだすことに努力する。また、分区内輪番制が行われれば、会員数の少ないクラブにも道が開かれるし、分区内で「次はどこ」「その次はどここのクラブが引受ける」かがはっきりわかり、自分のクラブは何年後に受ければいいのかを認識できるから以前より準備しやすくなるのではないかと。

(静岡第7分区) 直ちに分区内輪番制に移行は出来ないが賛成である。浜松クラブでは隔年に一人交換事業を行うことになっているので、空いている年度にどこかほかのクラブでやってもらいたい。中に会員数が少ないクラブがあるが、そうしたクラブ同士、またはより会員数の多いクラブとの合同で交換事業をしていくべきであるという意見もあった。またこうした事業は是非とも継続発展させていく必要があり、これをやめてしまったらロータリーの意味がない。

分区内輪番制については以上のような意見でした。これとは別に「受け入れ学生はお客様扱い」とか「必ずしも受け入れ学生は日本が第一希望ではない」といった意見や、「一年間滞在してもお礼の挨拶がないから地区でもっと教育すべきだ」とか「受け入れてみて金銭的な負担が予想外に多かった」といった意見もあったことを付記します。思うに、今年で2回目の国際奉仕委員長会議になったわけですが、全体的に一步前進したように思います。それは一つに分区内輪番制という聞きなれない言葉が各クラブに認知され始めたこと、もう一つは各クラブの国際奉仕委員がこうして一堂に会してお互い意見交換することで他のクラブの意見や地区の意見を聞いたことで、分区内輪番制について啓蒙を受けたということです。

青少年交換事業は今後も続けていかなければなりませんし、今より後退させてはいけません。またそういう事態になれば、ロータリーの意味が大いに減ってしまうことになるでしょう。問題はこれを契機として、たとえ違った形になるにせよ何年後かに分区内輪番制を制度化していかなければならないということです。そうなれば派遣学生の公募が可能になるし、それによって派遣学生の質が向上し、ひいては受け入れ学生の質の向上へとつながっていくでしょう。さらには地区青少年交換委員の仕事が今のような交換学生を集めることから解放され、受け入れ学生や派遣学生に対する教育により多くの時間が割けられるようになり、そういう意味でより良い循環ができ上がっていくことにもなるでしょう。こうしたことが実現すれば、この事業は発展していけるでしょうし、ロータリーの目標の一つであります国際親善への道がより確かなものになっていくでしょう。

資料2 青少年交換プログラムアンケート 取組 1 取組中 2 来年度取組 3 検討中その他  
 2006.2.26 国際奉仕委員長会議 理由 ①予算 ②ホストファミリー ③学校 ④経験なし ⑤その他

回答クラブ	取組			取組が3の場合理由					分区分制について
	1	2	3	①	②	③	④	⑤	
1 Y-1-3			○		○				なし
2 Y-2-2			○					○	G補佐・会長幹事会を中心に分区分制で取組む
3 Y-2-4			○		○				G補佐・会長幹事会を中心に分区分制で取組む
4 Y-3-4			なし	○	○		○		方法は様々あると思うが分区分制の考え方には賛成
5 S-1-2			なし						数クラブが合同して受け入れられる方法が良い
6 S-1-4			○	○	○				分区分制の会員が減少しており、分区分制で良い方法を検討したい
7 S-2-2			○	○	○				基本的には良い
8 S-2-4			なし						中学生の交換研修を姉妹クラブとしている
9 S-2-7			○	○	○				
10 S-3-8			なし					○	
11 S-3-9			○	○	○				
12 S-4-7			○	○	○				受入が現在より容易になると思う
13 S-4-9			○	○	○			○	賛成 1クラブでは継続が困難でも分区分制なら当番時に頑張れる
14 S-5-1			○	○	○				受入が現在より容易になると思う
15 S-5-3			○					○	クラブでの取り組みをしているので現状維持が良い
16 S-5-4	○								大変良いと思う 受入学生は卒業生でなく在学生が良い
17 S-5-5			○	○	○			○	アイデアは良いが、実際の導入にはクリアーすべき問題点も多い
18 S-5-9			○	○	○				
19 S-7-1	○								1年おきの交換を実施中 移行には3年程度期間の旗振り責任者が必要
20 S-7-2	○								大変有効であると思う
21 S-7-3			○	○	○				分区分制で1人ずつ受入に賛成 公募にも賛成
22 S-7-4			○	○	○		○		分区分制のクラブが受入体制を整えることができれば良いと思うが、当初は一部のクラブになる
23 S-7-5	○								クラブ負担を少なくするよう地区での予算をお願いしたい
合計	3	1	19	8	8	2	2	5	

84クラブ

### 資料3 青少年交換事業に関する申し合わせ（案）

国際ロータリー第2620地区静岡第6分区

当分区は会長幹事会において、青少年交換事業について種々討議をした結果、この事業がロータリー活動として世界的規模での友好と平和の推進、地域社会に与えるインパクト、そして自クラブの活性化にとっても大変有用なものであることを認識し、これが発展的に継続されることを願って次の通り申し合わせた。

1. 分区にて1年度に1クラブ以上の交換学生受け入れを行うよう努力する。
2. 受け入れの順番は決めないが、全クラブが実行することが望ましい。
3. 受け入れと派遣は必ずしも同一年度に行う必要はないが、両事業は一体のものである。
4. 事業実行を容易にするために、次のことを行う。
  - 1) 受け入れクラブの資金負担を軽減するために、分区内に青少年交換基金を設ける。基金の内容は下記の通り。
    - ① 各クラブ会員1名につき1000円の人頭分担金を毎年拠出する。
    - ② 基金の名義人及び管理責任者は当該年度ガバナー補佐とし、毎年度末にその収支を会長幹事会に報告する。
    - ③ 会員数は期首会員数にて計算する。
    - ④ 受け入れクラブに対し基金より一定額の補助金を支給する。支給金額については、当該年度の会長幹事会で決める。
    - ⑤ 基金を中止し清算する場合はその処理を当該年度の会長幹事会にて決める。
    - ⑥ 基金の拠出は2005～2006年度より実施する。
  - 2) 受け入れクラブの諸々の負担を軽減するため（例えばホストファミリーの提供等）、協力して事業の実行に当たる複数のクラブと提携することができる。

平成18年3月15日